踊っているとしても、殆ど話しが出来なかった。
—チェマ エステベスと一緒に過ごされた時は如何でした？
ぺぺは思い切って聞いてみた。
ぺぺが観察していると彼女は少し驚いたようだが、すぐに微笑みながら自然に答えた。
—素晴らしかったわ、彼と楽しく過ごしました、並外れた時間でした。彼は私のタイプの男性でした。幾らか時間が経って、ぺぺは彼なら多分そうだろうと信じた。
醜く背の低いぺぺにもソフィアは大きな情熱で抱擁した。歌が終わった時ソフィアはまだ逢っていない友達がみえているかも知れないので逢いに行くと言う。
スシがやって来た。
—ボス、ねえ、いいですか、誰かがあそこに居るでしょう。噴水のそばに。
—あの禿の人はポルセラノサ公爵と思うよ。然しもう一人は知らない、私の知っているところ（記憶）では特定するのは難しい。
—そうですね。もしかしたらマキシミリアノ バネソ、伯爵。
—ああ、もしかして、なるほど、なるほど。
—先日美容室で聞いたのですが、公爵には新しい愛人が出来たそうです。
—とても興味深いね。
—笑ってはダメですよ。全てをお知らせしなくてはなりません。
公爵は静かに話をしている、然しマキシマリアノから離れた、なぜならソフィアを見つけた。彼女を呼んだ。彼女は近づいた。二人は情熱的に抱きあった、そしてダンスを始めた。
—ボス、私は思うのですが、貴方はダンスのお相手無しの状態ですよ。私と一緒に踊りませんか。背は高くありませんが。